

2023（令和5）年の漁況

森脇和也・寺戸稔貴・寺門弘悦・岡本 満

1. まき網漁業

(1) 漁獲量の経年変化

図1に1960年（昭和35年）以降の島根県の中型まき網漁業による魚種別の漁獲量の経年変化を示した。

2023（令和5）年の総漁獲量は約7万9千トンで、前年比105%、平年（2018（平成30）年～2022（令和4）年の5ヶ年平均、以下同様）比111%であった。また、CPUE（1統1航海当り漁獲量）は60.7トンで、前年・平年を上回った。（前年比112%、平年比119%）。なお、2023年の漁労体数は10ヶ統（県西部2ヶ統、県東部8ヶ統）であった。

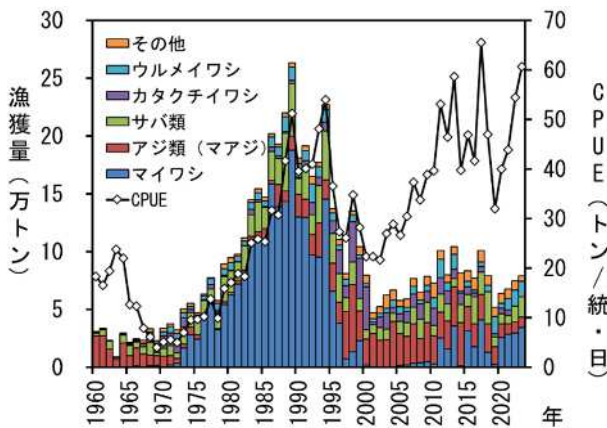


図1 島根県の中型まき網漁業による魚種別漁獲量とCPUEの推移（2002年までは農林水産統計値、2003年以降は島根県漁獲統計システムによる集計値）

本県の中型まき網漁業で漁獲される魚の主体は、1970年代後半～1990年代前半のマイワシから、1990年代後半にマアジに変遷し、2010年までは同種が主要な魚種となっていた。ところが、2011年にマイワシの漁獲割合が急増し、以後マイワシ、マアジ、サバ類の3種が主要な魚種となっている。魚種別の動向をみると、マイワシ（総漁獲量の43%）、サバ類（総漁獲量の22%）は前年を上回り、ウルメイワシ（同17%）、マアジ（同12%）、カタクチイワシ（同1%未満）は前年並みの漁況であった。

(2) 魚種別漁獲状況

図2～6に島根県の中型まき網漁業による魚種別月別漁獲動向のグラフを示した。

① マアジ（図2）

2023年の漁獲量は約9千2百トンで、前年並みで平年を下回った（前年比97%、平年比65%）。

漁獲の主体は、1歳魚（2022年生まれ）、2歳魚（2021年生まれ）で、0歳魚（2023年生まれ）はあまり見られなかった。例年、山陰沖ではマアジは春から初夏にかけてまとまって漁獲されるが、2023年1月から7月にかけては、2月に約2千トンで前年並みとなった他は平年を下回る漁況であった（総漁獲量5千トン 前年比89%、平年比58%）。また、8月～12月の漁獲量は前年並みで平年を上回る漁況であった（総漁獲量4千2百トン 前年比107%、平年比137%）。

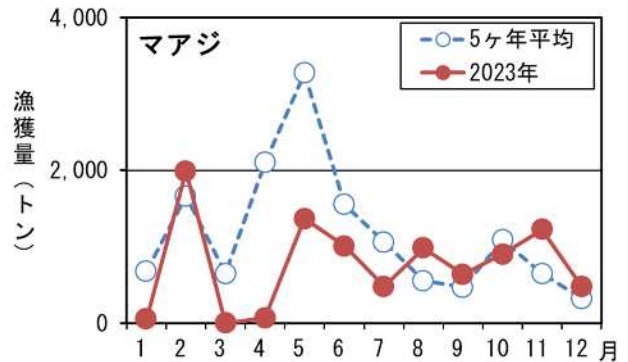


図2 中型まき網漁業によるマアジの漁獲量

② サバ類（図3）

2023年の漁獲量は約1万8千トンで、前年を上回り、前年並みであった（前年比127%、平年比134%）。

漁獲の主体は1歳魚（2022年生まれ）で、夏季以

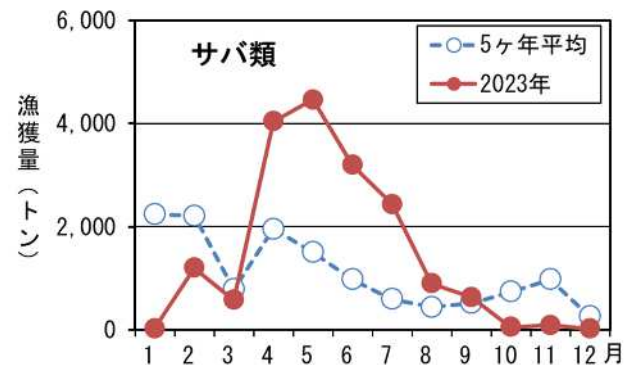


図3 中型まき網漁業によるサバ類の漁獲量

降は0歳魚（2023年生まれ）も混じって漁獲された。例年は秋から冬にかけて漁獲量が増加していたが、今年は4月～7月にかけて好調であった。本年の1月～3月の漁獲量は約1千8百トンで、前年並みで平年を下回った（前年比111%、平年比34%）。また、4月～6月の漁獲量は約1万2千トンで、前年・平年を上回った（前年比120%、平年比264%）。

③ マイワシ（図4）

2023年のマイワシの漁獲量は約3万4千トンで、前年並みで平年を上回った（前年比118%、平年比154%）。近年の月別の漁獲動向は、県東部を主漁場として3月～6月、9月～10月に漁獲がまとまる傾向にある。本年は3月に1万3千トンと過去5年間で2番目に多い漁獲量となった。

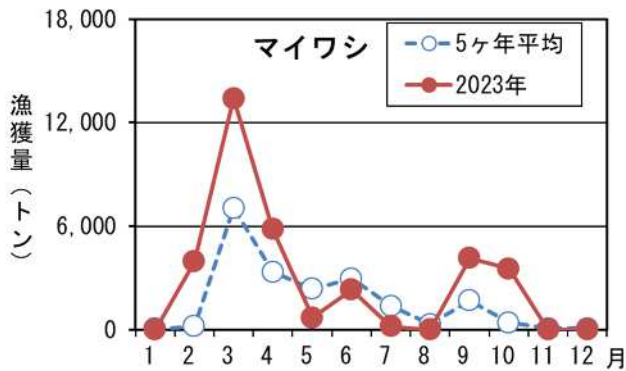


図4 中型まき網漁業によるマイワシの漁獲量

対馬暖流系群のマイワシ資源は2000年以降低水準期が続いていたが、2011年（県中型まき網漁獲量約2万5千トン）から漁獲量が急増した。2012年以降不漁年が散見するものの約1万5千トン～4万トンの漁獲量が続き、資源量は回復傾向にあると考えられている。

④ カタクチイワシ（図5）

2023年のカタクチイワシの漁獲量は132トンで、前年・平年を下回った（前年比36%、平年比5%）。

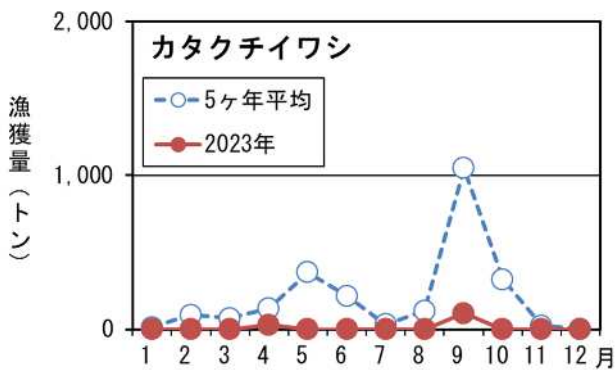


図5 中型まき網漁業によるカタクチイワシの漁獲量

2022年、2023年と2年続けての不漁であった。

⑤ ウルメイワシ（図6）

2023年のウルメイワシの漁獲量は約1万3千トンで、前年並みで平年を上回った（前年比98%、平年比137%）。ウルメイワシの漁獲量は年変動が大きい直近年は好調である。

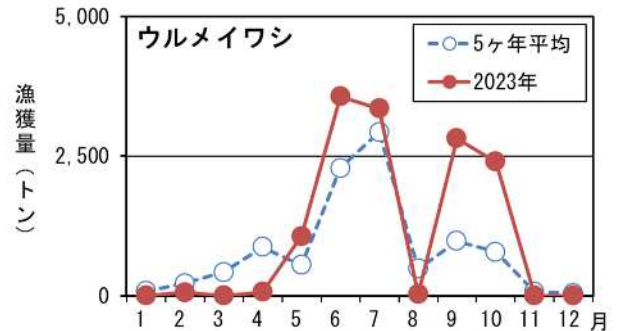


図6 中型まき網漁業によるウルメイワシの漁獲量

2. いか釣漁業

島根県浜田市に位置する浜田漁港で水揚げされた主要イカ類（スルメイカ、ケンサキイカ）の漁獲動向を取りまとめた。集計対象とした漁業種類は、いか釣漁業（5トン未満船）、小型いか釣漁業（5トン以上30トン未満船）および中型いか釣漁業（30トン以上）とした。なお、浜田漁港は県内外のいか釣漁船が水揚げする代表的な漁港である。

① スルメイカ

2018年以降における浜田漁港で水揚げされたスルメイカの水揚量の年推移を図7、水揚金額と単価の年推移を図8に示した。2023年の水揚量は67トンであり、前年（91トン）ならびに平年（2018年～2022年の平均：78トン）を下回った（前年比74%、平年比87%）。2023年の水揚金額は約4千万円（前年比85%、平年比101%）であった。平均単

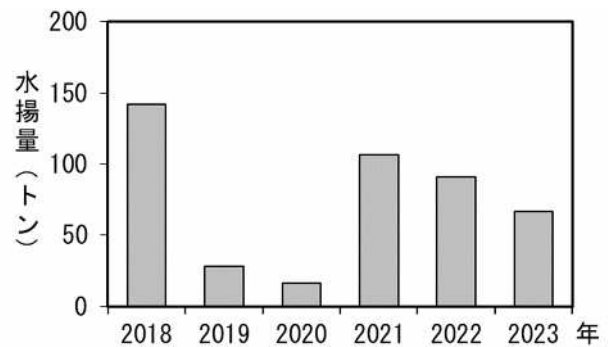


図7 浜田漁港におけるスルメイカの水揚量の年推移

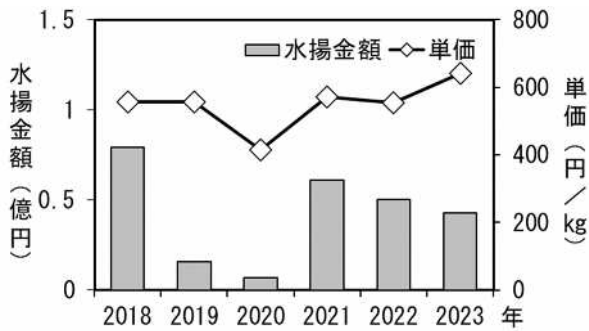


図 8 浜田漁港に水揚げされたスルメイカの水揚金額と単価の年推移

価は 641 円/kg であり、平年 (531 円/kg) の 1.2 倍だった。次にスルメイカの月別水揚動向を図 9 に示した。2023 年は 3 月以外、水揚げが低調であった。なお、本県では 12 月～3 月にかけて冬季発生系群の産卵南下群、4 月以降は秋季発生系群の索餌北上群が例年漁獲対象となっている。近年は両系群とも資源水準が低位にある*。

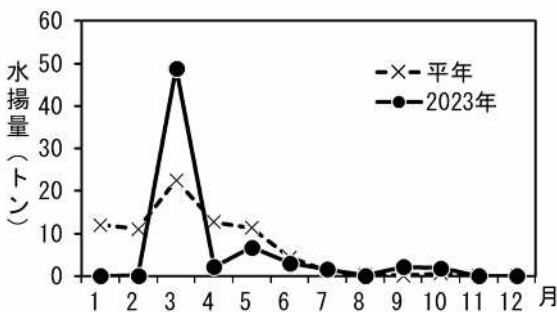


図 9 浜田漁港におけるスルメイカの水揚動向 (平年は過去 5 年 (2018 年～2022 年) の平均)

② ケンサキイカ

2018 年以降における浜田漁港で水揚げされたケンサキイカの水揚量の年推移を図 10、水揚金額と単価の年推移を図 11 に示した。2023 年におけるケンサキイカの水揚量は 45 トンであり、前年 (22 トン) を上回り、平年 (66 トン) を下回った (前年比 204% 平年比 68%)。水揚金額は約 7 千万円 (前年比 199%、平年比 77%) であった。平均単

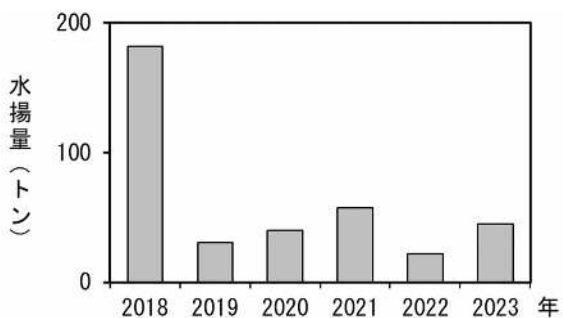


図 10 浜田漁港におけるケンサキイカの水揚量の年推移

価は 1,519 円/kg、平年 (1,469 円/kg) の 1.0 倍だった。

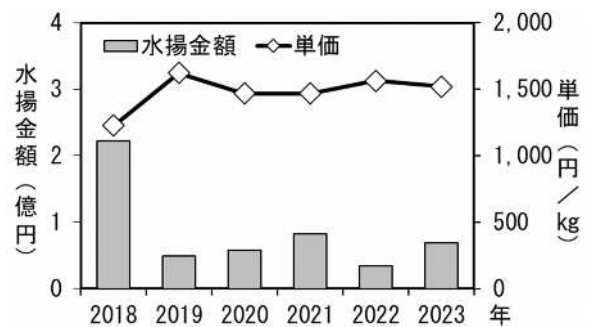


図 11 浜田漁港に水揚げされたケンサキイカの水揚金額と単価の年推移

次に、ケンサキイカの月別水揚動向を図 12 に示した。2023 年は大型のケンサキイカ型が主体となる春夏来遊群 (4 月～8 月) の水揚量が 5 月中旬から増え始めた。その水揚量は 23 トンであり、平年を下回った (平年比 63%)。小型のブドウイカ型が主体となる秋季来遊群 (9 月～12 月) の水揚量は 22 トンであり、平年を下回り (平年比 77%)、2019 (令和元) 年から 5 年連続して秋季来遊群の不漁が続いている。さらに、2023 年は春夏来遊群も低調な漁況に留まっていることから、今後の資源動向を注視する必要がある。

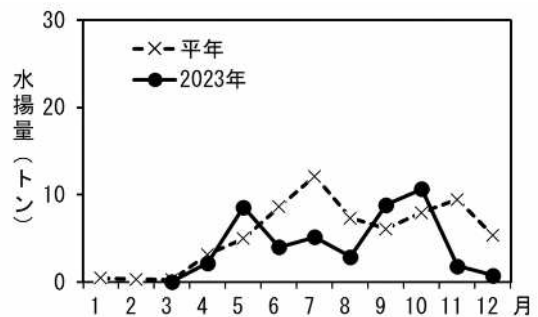


図 12 浜田漁港におけるケンサキイカの水揚動向 (平年は過去 5 年 (2018 年～2022 年) の平均)

3. 沖合底びき網漁業 (2 そうびき)

本県では現在、浜田漁港を基地とする 4 統が操業を行っている。本報告では、この 4 統を対象に取りまとめを行った。ここでは統計上、漁期年を用い、一漁期を 8 月 16 日～翌年 5 月 31 日までとした (6 月 1 日～8 月 15 日までは禁漁期間)。

(1) 全体の漁獲動向 (図 13)

浜田漁港を基地とする沖合底びき網漁業 (操業統数 4 統) の 2023 (令和 5) 年漁期 (2023 年 8 月

16日～2024年5月31日)の総漁獲量は2,052トン、総水揚金額は16億9,763万円であった。また、1統当たりの漁獲量(以下、CPUE)は513トン、水揚金額は4億2,441万円で、漁獲量は平年を18%下回ったが、水揚げ金額は平年を27%上回った(過去10年平均:629トン、3億3,356万円)。

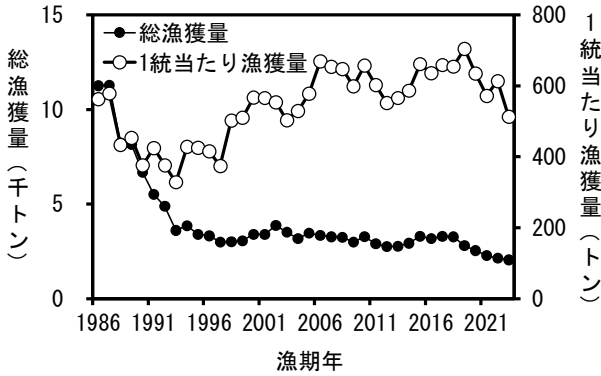


図13 浜田漁港を基地とする沖合底びき網漁業における総漁獲量と1統当たり漁獲量の経年変化

(2) 主要魚種の漁獲動向(図14)

① カレイ類

ムシガレイのCPUEは18トンで平年の4割となり、記録のある1986年漁期以降では最低値であった。ソウハチのCPUEは24トンで平年の6割、ヤナギムシガレイのCPUEは12トンで平年の1.0倍の水揚げであった。

② イカ類

ケンサキイカのCPUEは41トンで平年の1.1倍、ヤリイカのCPUEは4トンで平年の3割の水揚げであった。

③ その他の魚類

アナゴ類のCPUEは60トンで平年の1.3倍となり、記録のある1986年漁期以降では過去最高値であった2019年漁期(62トン)に次ぐものであった。キダイのCPUEは81トンで平年の1.0倍、アンコウ類のCPUEは25トンで平年の7割、アカムツのCPUEは43トンで平年の8割、ニギスのCPUEは2トンで平年の2割、マフグのCPUEは8トンで平年の3割であった。

この他、マトウダイのCPUEは12トン(平年の5割)、イボダイのCPUEは0.2トン(平年の1割未満)、マダイのCPUEは40トン(平年の2.1倍で記録の残る1998年漁期以降では最高値)、カワハギ類のCPUEは11トン(平年の5割)であった。

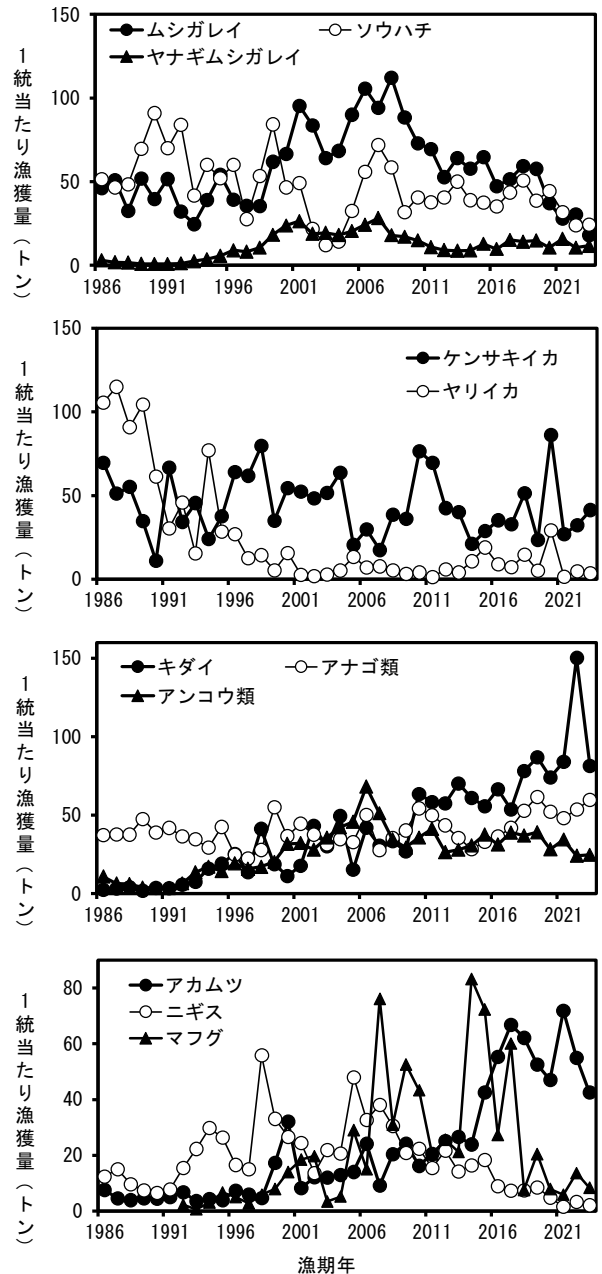


図14 浜田漁港を基地とする沖合底びき網漁業における主要魚種の1統当たり漁獲量の経年変化

4. 小型機船底びき網漁業第1種(かけまわし)

小型機船底びき網漁業第1種は山口県との県境から隠岐海峡にかけての水深100~200mの海域を漁場とし、現在37隻が操業を行っている。ここでは統計上、漁期年を用い、一漁期を9月1日~翌年5月31日までとした(6月1日~8月31日までは禁漁期間)。

(1) 全体の漁獲動向(図15)

2023(令和5)年漁期(2023年9月1日~2024年5月31日)の総漁獲量は2,631トン、総水揚金

額は 15 億 202 万円であった。1 隻当たり漁獲量（以下、CPUE）は 71.5 トン、水揚金額は 4,084 万円で、漁獲量では平年を 22% 下回り、水揚金額では平年を 1% 下回った（過去 10 ヶ年平均：91.3 トン、4,131 万円）。

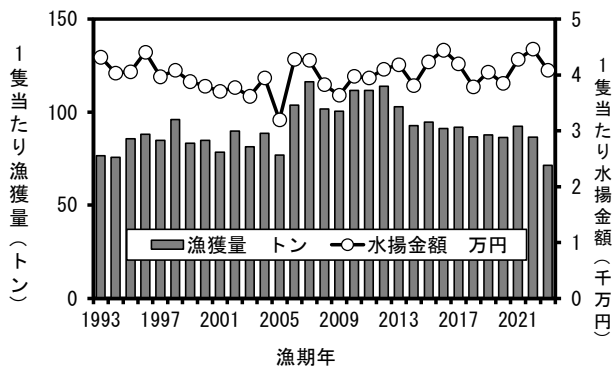


図 15 小型機船底びき網漁業第 1 種における 1 隻当たり漁獲量と水揚金額の経年変化

(2) 主要魚種の漁獲動向 (図 16)

① カレイ類

ソウハチの CPUE は 9.3 トンで、前年の 7 割、平年の 6 割の水揚げであった。ムシガレイの CPUE は 2.1 トンで、前年の 9 割、平年の 8 割であった。メイタガレイの CPUE は 0.2 トンで、前年の 7 割、平年の 3 割であった。この他、ヤナギムシガレイの CPUE は 1.3 トン（平年の 1.0 倍）、アカガレイの CPUE は 3.4 トン（平年の 6 割）、ヒレグロの CPUE は 4.0 トン（平年の 6 割）であった。

② イカ類

ケンサキイカの CPUE は 1.3 トンで、前年の 2.1 倍、平年の 1.0 倍の水揚げであった。ヤリイカの CPUE は 3.3 トンで、前年の 1.9 倍、平年の 1.2 倍であった。スルメイカの CPUE は 2.7 トンで、前年・平年の 1.2 倍であった。

③ その他の魚類

アカムツの CPUE は 3.5 トンで、前年の 1.0 倍、平年の 9 割の水揚げであった。この他、アンコウ類の CPUE は 7.6 トン（平年の 1.0 倍）、ニギスの CPUE は 7.0 トン（平年の 1.0 倍）、アナゴ・ハモ類の CPUE は 3.9 トン（平年の 7 割）、キダイの CPUE は 4.6 トン（平年の 1.0 倍）、ハタハタの CPUE は 0.01 トン（平年の 1 割未満）であった。

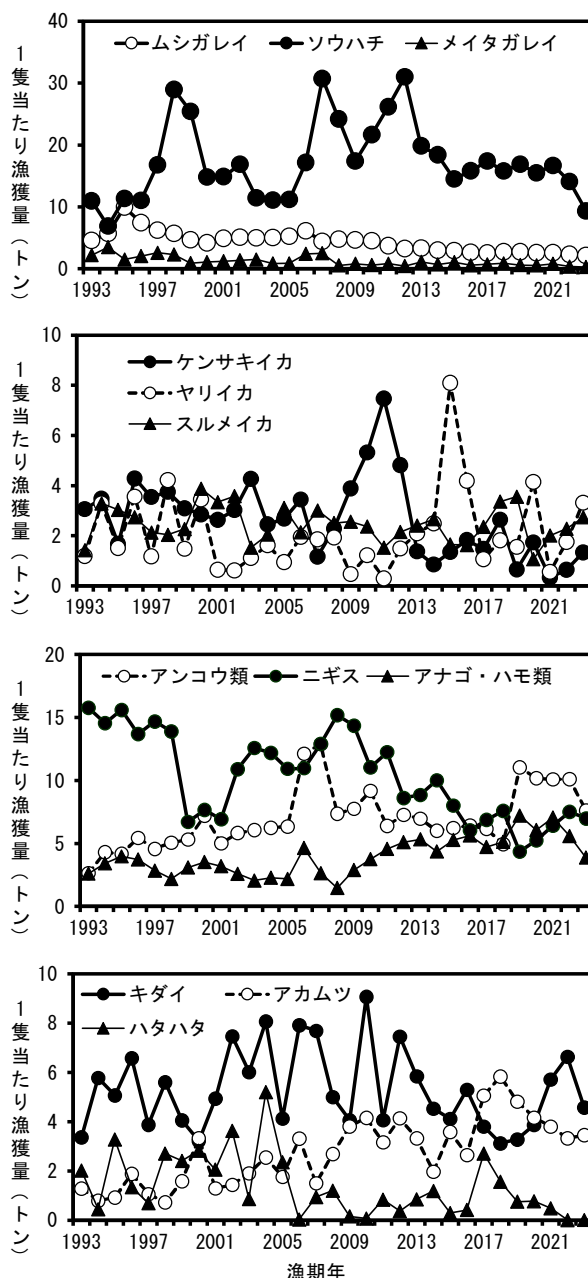


図 16 小型機船底びき網漁業第 1 種における主要魚種の 1 隻当たり漁獲量の経年変化

5. ばいかご漁業

石見海域におけるばいかご漁業は、小型機船底びき網漁業（第 1 種）の休漁中（6～8 月）に行われる。漁場は本県沖合の水深 200m 前後であり、2023（令和 5）年は 3 隻が操業した。

解析に用いた資料は、当センター漁獲管理情報処理システムによる漁獲統計と各漁業者に記帳を依頼している標本船野帳である。これらの資料をもとに、漁獲動向、漁場利用等について検討を行った。なお、漁獲量および水揚金額の 9 割程度占めるエッチュウバイについては、別記のエッチ

ユウバイの資源管理に関する研究を参照のこと。

(1) 漁獲動向 (図 17)

2023 年漁期の総漁獲量は 94.3 トンで前年比 116%、総水揚金額は 6,446 万円 で前年比 119% だった。漁獲量は、1989 (平成元) 年の 175 トンから増減を繰り返しながら減少傾向を示し、2009 (平成 21) 年以降は 100 トン以下で推移している。平成 20 年代の始めまでは 6 隻~7 隻が操業していたが、徐々に減少し、2016 (平成 28) 年以降は 3 隻のみの操業となったことが、総漁獲量減少の一因と考えられる。

水揚金額も漁獲量の減少に伴って低下傾向であったが、2019 (令和元) 年漁期以降、増加に転じている。これは 2003 年~2014 (平成 26) 年は漁獲の大部分を占めるエッチュウバイの価格が 500 円/kg を下回っていたが、2022 (令和 4) 年はエッチュウバイの価格が 650 円/kg と持ち直し、2023 年は 670 円/kg となったためである。

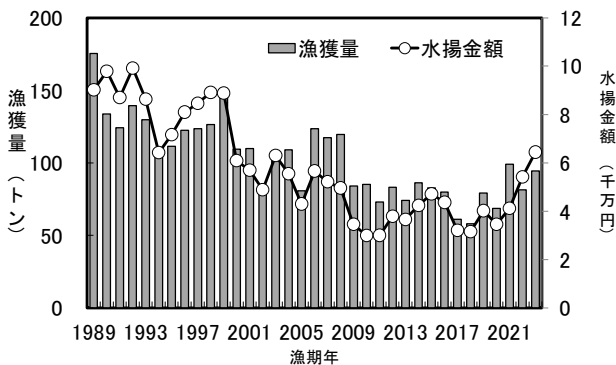


図 17 石見海域におけるばいかご漁業の漁獲量と水揚金額の推移

(2) 1 隻当たり漁獲量 (図 18)

2023 年漁期の 1 隻当たりの漁獲量は 31.4 トンと前年比 116% で、1989 年以降では、2021 (令和 3) 年に次いで多かった。また、2005 (平成 17) 年および 2009 (平成 21) 年に大きく減少したが、2019 年以降は平均 28 トン程度で推移している。

1 隻当たり水揚金額は、2,149 万円と前年比 119% で、1989 年以降で最高だった。1989 年以降、増減を繰り返しながら 2009 年には 576 万円まで低下したが、その後回復して 2014 (平成 26) 年以降は 1,000 万円を超えている。

漁獲の主体であるエッチュウバイの資源水準が良好と考えられること、前述のとおり単価が上昇していることから、1 隻当たりの漁獲量および水揚金額はそれらを反映して高くなっている。

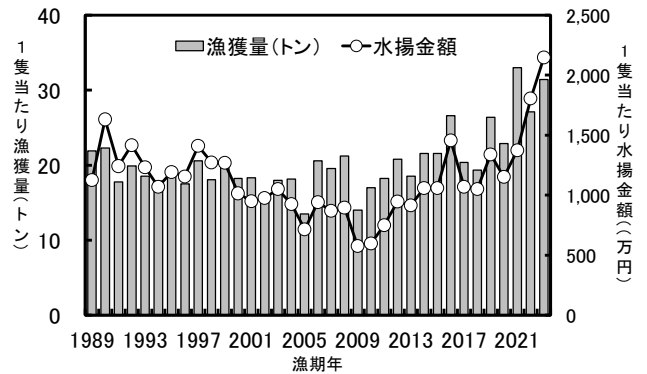


図 18 石見海域におけるばいかご漁業の 1 隻当たりの漁獲量と水揚金額の推移

※ (国研) 水産研究・教育機構 水産資源研究所 令和 5 年度のスルメイカの資源評価